

## 大豆NEWS!

vol.14

「国産大豆への期待がいっぱい」

～ 関東ブロック水田農業推進協議会・水田営農推進本部合同会議開催さる～

1月13日(木) 関東管内各県、生産者団体及び実需者とその団体を迎えて標記の会議が開催されました。

大豆については、長野県から「農協等で作業受託の会社を出資してつくり、地域の大豆の作業受託を行って、200ha近い面積を増加させた。生産された大豆は、地域の豆腐屋さんと契約して販売した」との事例報告がありました。

さらに、栃木県の農村女性グループが、自ら大豆を生産し、豆腐に加工・販売を行っている取組を紹介。町役場からの呼びかけに応え、町の交流施設の食堂で利用する地場産大豆使用豆腐を生産したところ、観光客等の要望が強く、加工工場を整備。その後、豆腐に加え、がんもどき、厚揚げ、洋菓子類(ババロア、ドーナツ)等も作るようになり、価格は高いが連日完売の盛況とのこと。加工・販売に携わるようになって、消費者の要望がよくわかるようになったとのこと。最近、従来使っているタチナガハに加え、新品種の「たまうらら」を試作したところ、歩留まりも良く、豆腐に向いているとのこと。ただしこの品種は刈り残しが生じやすいため、技術的な対策が必要との要望がありました。

実需者サイドからは、大手豆腐業者が「年間9,000トンの原料大豆のうち、平成元年当時は約半分を国産だったのに現在は約1割。原因は、価格・品質のばらつき・供給の不安定性。これらが安定してくれば、使いやすくなるので、ぜひ安定を。消費者は安心・安全を第一に国産を求めており、非遺伝子組換え大豆使用で味に大差が無ければ、価格の安い外国産に流れてしまう。製造側としては味を特に重視。選別等の経費を軽減する等の工夫で、外国産と価格面での競争力を強めることは可能。生産者と実需者との協議の場を多く設営してほしい。品種はタチナガハが多いが、豆腐用としては問題があり、加工適性の高い新品種の育成を求めると発言。

納豆の団体は、今後とも国産が伸びるとの見通しの紹介の後、「納豆用大豆は小粒系が主で、品種・成分内容等にこだわっている。納豆は、豆の姿がそのまま残るので、選別・調製は十分に行っていただきたい」と要望。

問屋の団体は、「北海道のとよまさり、九州のフクユタカ、富山のエンレイが人気。大豆は地域毎に品種の特性があるので、用途別に実需者の望む大豆の生産に努めて欲しい」との意見。

研究サイドからは稲・麦・大豆の汎用型不耕起播種機の紹介があり、現地実証の成績は、大幅な時間短縮が実現し、収量も慣行栽培とほぼ同等若しくは、若干多かった等、実用化できる段階にきており、積極的な導入を求めるとのこと。

この会議により、多くの解決しなければならない問題を抱えているとはいえ、国産大豆への期待が大きいことを改めて認識したところです。関東ブロックでは、生産者と実需者の意見交換の場として、「流通・消費に関する懇談会」を2度にわたって開催し、各県段階や先進的な地域段階においても協議体制が整いつつあります。この他、品種について、関東地域の主力品種である「タチナガハ」の再評価についても別途取り組んでいます。また、「たまうらら」、「あやこがね」等の新品種も続々と品種登録され、栽培適性試験・製品試作等が始まっており、早期普及が待たれるところです。今後もこれらの活動を更に推し進め、売れる大豆作りを力強く支えていきたいと考えています。

発行：不定期

発行元：農林水産省畑作振興課 豆類班 tel 03-3502-8111 (内線 4318、4319)

- ・今回の大豆NEWS!は関東農政局の協力で作成いたしました。
- ・記事や大豆生産振興に関する御質問・御感想など、御自由にお寄せください。
- ・記事を転載される場合は、御一報ください。
- ・<URL> <http://www.maff.go.jp/soshiki/nousan/hatashin/>

